

- 1 足跡の海中に絶え初明り
- 2 汝寝ねて夜どほし冬の空があり
- 3 冬しんと筑波はうすく空を押し
- 4 金澤の睦月は水を幾重かな
- 5 鯉呼べば子供の来る氷かな
- 6 物憂げに寒鯉匂ひはじめたり
- 7 寒鯉朱身ほとりを湯にしつつあり
- 8 寒鯉の己が名知らねば火の如し
- 9 ゆゑに侘助水も己を不気味がる
- 10 山々に寒をあづけて去る日かな
- 11 水の中に道あり歩きつつ枯れぬ
- 12 物憂さも冬の渚へ出る程度
- 13 水の世は凍鶴もまたにぎやかし
- 14 窓の雪料理に皿も尽くる頃
- 15 君よこの夜を動かねば凍る水
- 16 立木みな枯れて油のごとき天
- 17 寒林を離れ立つ木も絶えし今
- 18 言葉冷たし草にかむさる雪よりも
- 19 肉食ひしのち山や川なんの冬
- 20 ばら撒かれ木端ざんざと暮るる冬
- 21 波止場その闇すら荒し夜目に冬
- 22 薄氷や曇が老いて吃りだす
- 23 枝がちの空も冷たく古りゐたり
- 24 闇白し幹が奥へと縦に続き
- 25 榛といふ名前に生まれさへすれば

- 26 春暁をしばし冷たき雲の空
- 27 一睡と芝焼きたるは同じこと
- 28 のぞまれて橋となる木々春のくれ
- 29 富士低くたやすく春日あたりけり
- 30 まんさくの拔身の花は痒からむ
- 31 疎密ある春の林の疎を歩く
- 32 奥行きに降りこむ雨や花薺
- 33 暁はかならず槇のおぼろかな
- 34 西国の人とまた会ふ水のあと
- 35 鯉抜けし手ざはり残る落花かな
- 36 掲げむとして空に置く花篝
- 37 疼痛のたとへば花の水面かな
- 38 在ることの不思議を擲恋愛す
- 39 春や飛びつく砂鉄吾磁石汝
- 40 筆立に筆を待たせて春ゆきぬ
- 41 蜜蜂や夢の如くに雑木山
- 42 五月来る甕づたひに靴を手に
- 43 明るさに箒たふれし白牡丹
- 44 露と聞きまづは心の軋むかな
- 45 色だらうあるいは暗い立葵
- 46 雲甘く嶺を隠しぬ蝸牛
- 47 眠たさのあやめの橋を斜交ひに
- 48 菖蒲枯れ吊橋燃えてゐるごとし
- 49 六月に生まれて鈴をよく拾ふ
- 50 雲は雨後輝かされて冷し葛

- 51 瓜の花冷たし水の中の手も
- 52 棒の描く輪が花柚子と重なれる
- 53 手に団扇宵の渚のあるばかり
- 54 風鈴の短冊に川流れをり
- 55 来て夜は沖のしづけさ蟬の穴
- 56 仏壇は真桑瓜より軽からむ
- 57 蟬常に遠しよ水の味して汝
- 58 真白き箱折紙の蟬を入れる箱
- 59 花魁草みな枯れてゐるまぼろしかな
- 60 夕立は浮きたつものと皿小鉢
- 61 はしやぎあひつつ夕立の縁へ逃ぐ
- 62 象老いてかの夕立を忘れたり
- 63 臆すれば切らるる蓮の花ばかり
- 64 空蟬の眼の紫も朝かな
- 65 夕暮は金魚の旬と昔昔
- 66 ややありて手花火を手放しにけり
- 67 戸を開けて待てば夏空のみありぬ
- 68 夕焼の煮詰まりし目をつむる人
- 69 虫籠の中の日暮や爪楊枝
- 70 夏の權冷たく差し出されにけり
- 71 憧れて秋となる夏鳩時計
- 72 秋燕の記憶薄れて空ばかり
- 73 星空にときをりの稲光かな
- 74 あをふりかかる初秋の荒野あり
- 75 星々のあひひかれあふ力の弧

- 76 刻々と雨になる屋根花木槿
- 77 細筆の寥れて月の高々と
- 78 霧雨や吾を疎みては幾鏡
- 79 水に恋してより激しこぼれ萩
- 80 絵は生きてゐる秋草に身を浮かべ
- 81 西は西鷄頭持つて立ちたるよ
- 82 輪の如き一日が過ぎ烏瓜
- 83 冷たき戸秋の日は斜めに当たる
- 84 製図台夜通し秋の線引かる
- 85 秋深し充実の緋を身にまとひ
- 86 秋淋し日月ともにひとつゆゑ
- 87 十月を針の研究してゐたり
- 88 真昼から暗むは雨意の帰り花
- 89 草木に睡なれば人の秋
- 90 刈稻の光はあれど散蓮華
- 91 茸から糸でて南部鉄瓶か
- 92 山茶花に真白き布の被せあり
- 93 金沢八景腹這ひに冬来りける
- 94 寒林を遠く治めて天淋し
- 95 シュワキマセリ水中のもの不可視なり
- 96 針山の肌の花柄山眠る
- 97 枯蓮を手に誰か来る水世界
- 98 大いなる霜の左の現れたり
- 99 門枯れて名前が少しづつ違ふ
- 100 甘露煮がみなに届くよ霜柱